

虫たちの中で、世界的に見てもブナ属と強く結びついた種というのはどのような顔ぶれなのだろうか。例えば、フジミドリシジミは近縁種が台湾や中国大陆にも分布していて、やはりブナ属を食樹としている。ブナと共に分布を広げて、各地で種分化を起こしたと考えてよいだろう。チョウ以外では、特に甲虫では、このような種はいるのだろうか。ヨコヤマヒゲナガカミキリなどは、その可能性があると考えている。少なくとも日本ではブナのみを食樹として、北海道を除けばブナと重なる分布を示す。一方、同じブナの生木を食べる種でも、クワカミキリの場合は対照的な例である。非常にブナ属を好むが、種や属の分布から考えると、分布域の北限付近の個体群が食性をブナ属にまで広げたにすぎないのであって、ブナ属との出会いの歴史はおそらく浅いのではないかと思う。さらに、ホソコパネカミキリ属などはまた別の例で、世界各地でそれぞれの土地の極相林を生活の場としているために、日本では一見ブナとの結びつきが強いようにみえるのではないだろうか。

遠く中国、台湾などにもブナ属の樹木が分布することは古くから知られていたようだが、最近 *Sibataniozephyrus* 属の蝶の発見によって、にわかにはブナ属が虫屋の注目を集めたように思われる。私は他人と同じことをするのが苦手なひねくれた性格をしているので、注目を集めている虫にはそれほど興味をかきたてられないのだけれど、台湾や中国の各種のブナ属の自生地を訪ね歩いてその甲虫を調べ、ブナと共に繁栄し種分化をしてきた種をさぐり、その起源について考えてみたい、という夢を描いている。しかしながら現在は中国大陆などでは自由に採集ができる場所も限られるようだし、私もこれまで但馬以外はほとんど歩いたことがないから、まずは国内各地のブナ林を歩くことから始めたい。

但馬に通っていたころは、年間を通してひとつの地域の季節が巡る様子を眺めてきた。そこから得た自然観と、地元の人から受けた好意とは、これからも大切にしていきたい。浜坂の城山や観音山に、車で2日おきぐらいに通っていた時期があったが、ある人から、君はよく出会うから浜坂で家庭教師をしないかと声をかけられたことは、たえず外来者であることを意識して、地元の人に引け目を感じていた私には嬉しい出来事だった。

今回のIRATSUMEの原稿をまとめるにあたり、鳥取に住んだ最初の年の採集記録を拾い出す機会があった。浜坂に自転車置いて走り回り、関宮に行きたくて氷ノ山を越えて歩いた頃、ひとつの種類をたくさん採集することには抵抗があり、頭数を決めながら採っていたことなど、

いろいろ思い出されて懐かしい。いろいろな虫との出会いは今なお鮮やかな感動を伴って蘇るけれど、それは独りの感傷にすぎないから、いちいち書き留めることはよそう。ただ、最近は何じめての場所へ出かけても昔のように感動する場面が少なくなった。最も感性が豊かだった時代に過ごした場所が但馬だったということは事実のようだし、いまだに私が但馬の山々にこだわりつづけるのは、上に書いたような興味もさることながら、昔のひたむきだった自分の影を追いかける気持ちがあるからだと思う。もちろん、自然の豊かさも大きな魅力ではあるけれど。

但馬通いの日々

加野 正

今回で「IRATSUME」も20号になる。ということは但馬むしの会も20年つづいたということになる。大変喜ばしいことである。私自身は現在コロンビア国に在住しており、但馬との関わりはなくなったが、一時期但馬に通い、ムシを追いかけた頃があった。

但馬むしの会は、豊岡高校生物部のOBと地元の昆虫愛好家の努力によって創設されたと思う。私が入会したのは、会の創設後数年たってからだと思う。但馬出身者でなく、また、但馬のムシを調べていたわけでもない私がこの会に加わったのは、鳥取大学の後輩である石田達也氏の勧めによるものである。当時の私は日本の各地を歩き回りチョウを採集していたが、じっくり落ち着いてムシの調査をできる自分のフィールドをさがしていた時期であり、すぐに入会した。私は大阪生まれで、その後兵庫県南部に移り住み、大学時代は鳥取で過ごしたということもあり、地理的にも親近感を抱いた。自分のフィールドでムシを調べるといのは、コレクションとはまた一味違ったムシの楽しみかたができる。

入会当時はちょうど大学での卒論研究をしている頃であり、続く2年間は大学院の修士課程で修論研究を行っていたので、但馬との関わりは薄かった。私が積極的に但馬に通い始めたのは、大阪の某薬品会社に就職して後の1980年以降である。1986年に青年海外協力隊でコロンビアに派遣されたので、実質6年間ほどである。

大阪在住の谷角素彦氏、京都在住の足立義弘氏、少し遅れて入会した島田真輔氏そして私の4人がよく一緒に但馬に通った。当時我々の間では、京阪神支部と自称し



左より、筆者・足立義弘氏・島田真輔氏。

ていた。

但馬は実に遠い所である。京都、大阪から距離的にはさほど遠くもないが、行くにはかなり時間を要する。実際信州に行くほうが簡単だし、飛行機を使えば北海道や沖縄のほうがよほど早く行ける。特に、車の運転のできない谷角氏と私にとっては大きな障害であった。これに関しては、島田氏と足立氏に負うところが多かった。足立氏は勤務の関係で休日が不規則で、我々とは日程が合わないことが多く、特に、島田氏にはよくお世話になった。車の都合がつかない時は鉄道かバスを利用し、現地で地元のメンバーのお世話になったり、リュックをかついで歩いたりした。

とにかくこの6年間は、波はあるもののよく但馬に通った。その後、島田氏が退職して本屋を開店されたり、私も退職したりで、状況も変わり、この4人体制は崩れてしまった。最後の1年間は、私自身免許をとって車を買ひ、1人で行くようになった。

はじめの頃は、4人ともチョウばかり調べていた。あまりテーマがチョウばかりに偏っていたので、徐々に他のグループにも手を広げようということでカミキリムシ、フン虫、クワガタムシ、オサムシなどの調査も始めた。

あの頃は4人も大阪市立自然史博物館友の会に入会しており、“大阪の昆虫をしらべる会”に参加していた。ここで学んだことは但馬で実践していた。

但馬ではいろいろな所に行ったが、私にとって最も思い出深いのは扇ノ山の小ヅッコ小屋であろう。初めて小ヅッコ小屋に登ったのは、学生だった頃と記憶している。しかし、就職後但馬に通い出した当初は、あまり小ヅッコには行っていない。なにせ大阪からは最も遠い所に位



1996年1月3日に行われた但馬むしの会総会。

置するので、カミキリムシなどの甲虫を始め出してから通うようになった。そのうち小ヅッコが採集の中心になった。

ただで泊まれる場所があるということは、非常にありがたい。ブナ林もあり、いつ行っても気持ちのよい所であった。昼は採集、夜は夜間採集することもあったが、普通はストーブを囲み、飲み、食ひ、そして語り合った。黒井和之氏や山本一幸氏などの地元の会員も集まり、焼き肉宴会を行ったこともあった。帰りには湯村温泉で風呂につかり、垢を落として帰るというのも大きな楽しみであった。

あの頃は仕事もそれなりに忙しかったが、ムシの調査も頑張っていたと思う。1986年からはコロンビアに在住し、家庭も持った。但馬のムシと離れて、すでに10年が過ぎた。当然コロンビアでもムシを採集している。安全性や交通の便の悪さもあり、採集は結構難しい。子供の昆虫採集の習慣のないこの国では、研究者もアマチュアも極端に少ない。昆虫の種類数はものすごく多いが、情報も少なく同好者もなしにムシを調べるのは、結構きついものである。そういう意味でも同好会の存在というのは大きいと思う。

私の虫歴もすでに27年になるが、但馬に通ったあの6年間は私にとって思い出深い時期のひとつである。また、但馬むしの会のことはコロンビアにいても、いつも気にかかる。1996年の総会に久しぶりに出席できた。皆年齢をとったせいかな、以前に比べ活気が低下したように感じた。ムシを調べるための環境は、以前に比べ整っているように見受けける。いくら忙しくても、年齢をとってもそれなりのやり方があると思う。「IRATSUME」30号をめざして頑張してほしい。